

席卷する CAN-DO リストについての一考 ―グローバル人材育成が求められる中で―

中井 弘一

文部科学省の平成 24 年度の取り組みの一つに「英語力を強化する指導改善の取組」がある。グローバル人材育成の施策の一環である。この事業では、各都道府県に拠点校(中高各 2 校)を設け、新学習指導要領の着実な実施を促進するとともに、英語の使用機会の大幅な拡充やモチベーションの一層の向上を図る等の優れた取り組みを支援することになっている。取組には以下のことを含むことを求めている。

- ・「CAN-DO リスト」の作成と活用
- ・外国人教員、ALT、ICT の効果的な活用
- ・外部からの指導を受けながら授業実践の積み上げ

これに基づき、各都道府県でも、取り組み内容の一つとして「生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を、「CAN-DO リスト」の形式で設定・公表するとともに、その達成状況を把握・公表し指導に生かすこと。なお、「CAN-DO リスト」の内容は、外部検定試験等により把握した生徒の学習状況を踏まえ必要に応じて見直し改善を図ること」と拠点校には伝えている。授業シラバスに「到達目標」を設定することが求められるようになって以来、教師がこれを指導するというだけでなく、生徒が授業で何ができるようになるかが問われるようになった。そして今、この CAN-DO リストの設定である。こうした動きはどこから生まれ、求められるようになったのだろうか。日本の英語教育の学校現場は、果たしてこの movement に対応できるだろうか。

グローバル化という表現が早急な人材育成の根拠として金科玉条のようにかまびすしく使われているが、グローバル化とはどのように捉えられているのだろうか。文部科学省の国際教育交流政策懇談会の議事録に、『「グローバル化とは、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象ととらえることができる。特に「知」はもともと容易に国境を越えるものであることから、グローバル化は教育と密接な関わりをもつ。さらに「国際化」はグローバル化に対応していく過程ととらえることができる」注1』と記載されている。そこには、「知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、製造業等の海外移転による国内雇用の変化をもたらしている」

という経済的な危機感が反映している。地球市民になるためにというより、日本の国益のために競争できる人材を育成することが求められており、教育も哲学的普遍性を求めるより、実学実用的な知識・技能の習得が求められ、それを基盤として、「何ができるのか」という差し迫った要求に応えざるを得なくなっている。教育の成果を数値で示す狭い意味での学力が教育の全てであるという認識傾向が非常に強まったということであろう。

PISAの学力テストを実施しているOECDが求められる人材として3つのkey competenciesをまとめている。①自律的に行動する能力 (Act autonomously) ②社会的な異質の集団における交流能力 (Interact in heterogeneous groups) ③社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力 (Use tools interactively e.g. language, technology) である。注2) これらは国の教育行政にも大きく影響を与えている。文部科学省は、規制緩和の進む、知識基盤社会が進む競争社会において、「自己の能力を発揮し社会に貢献するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である」としている。よって、新学習指導要領の根幹を成す理念は「思考力・判断力・表現力等を確実にほぐくむ」であり、そのための活用型の学習、課題解決型の学習や探究的な学習が求められている。言語の運用能力も必要な力であるが、なによりも「習得・活用・探究」がグローバル化対応の礎になるということである。したがって、1000語の文章を5分で読むことができるというような単なる言語能力を評価するCAN-DOリストでは用をなさない。

ところで、このCAN-DOリスト、語学のコミュニケーション能力別のレベルを示す国際標準規格として欧米で幅広く導入されつつあるCEFR（セフアール）：Common European Framework of Reference for Languageに関わりを持っている。言語を異にする民族が経済的にも文化的にも交流するヨーロッパにおいては、具体的な実力を示す評価が必要であるという状況があることを認識する必要がある。小池生夫はCEFR創設の目的を、「欧州国家を形成するために、より多くの異民族間の広い交流が必要であり、現代語によるコミュニケーション能力をできるだけ多くの人々に持ってもらう必要がある。このためには、自己啓発も含めた現代語教育の重視が必要である。さらにコミュニケーションの効果的行動ができるためには学習者が必要な知識と技能を身につけるために必要な言語能力を総合的に記述する必要がある」注3)と述べている。

ただ、CEFRの提案のなかにpluriculturalism(複文化主義)と plurilingualism (複言語主義)がある。これは Multiculturalism (多文化主義) Multilingualism (多言語主義)とは異なる。多言語主義は社会の中に複数の言語が併存し別々に使用されている状態、社会的状況を指すのに対し、複言語主義は、一人の人間の中に複数の言語能力があり、現実の場で必要に応じて言語を切り替えながら社会的な課題を解決する状態、しっかりとした母語の基盤を持った成人がさらにL2やL3の能力を兼ね備え、相手と共有された言語によって文化差を乗り越えて意思疎通を図ると

いう、「母語+複数言語」能力を持つ個人に意識を持っている。接する人の状況に応じて対応することが前提である。具体的には A1（易）～C2レベル（難）があり、A1 レベルの簡単な description には、

Level A1 is the lowest level of generative language use - the point at which the learner can interact in a simple way, ask and answer simple questions about themselves, where they live, people they know, and things they have, initiate and respond to simple statements in areas of immediate need or on very familiar topics, rather than relying purely on a very finite rehearsed, lexically organised repertoire of situation-specific phrases.

- Can understand and use familiar everyday expressions and very basic phrases aimed at the satisfaction of needs of a concrete type.
- Can introduce him/herself and others and can ask and answer questions about personal details such as where he/she lives, people he/she knows and things he/she has.
- Can interact in a simple way provided the other person talks slowly and clearly and is prepared to help.

C2 レベルの description には、

Level C2 is intended to characterise the degree of precision, appropriateness and ease with the language which typifies the speech of those who have been highly successful learners. Descriptors calibrated here include: convey finer shades of meaning precisely by using, with reasonable accuracy, a wide range of modification devices; has a good command of idiomatic expressions and colloquialisms with awareness of connotative level of meaning; backtrack and restructure around a difficulty so smoothly the interlocutor is hardly aware of it.

- Can understand with ease virtually everything heard or read.
- Can summarise information from different spoken and written sources, reconstructing arguments and accounts in a coherent presentation.
- Can express him/herself spontaneously, very fluently and precisely, differentiating finer shades of meaning even in the most complex situations.

とある。どちらにしろ、能力評価であり、あるひとつのことを成し終えることみる業績評価・達成評価でなく、何をどれくらいできるかという運用能力、ある状況のもとで何がどれくらいできるかという発揮能力を見ていかなければならない。潜在能力として保有している力では、ブラックボックスになり、評価者となる教員は判断できないこともある。どちらにしても評価

は難しい。

目標として掲げる CAN-DO リストと評価としての CAN-DO リストとには距離があるように思われる。つまり。到達目標・達成目標は、目標管理システムとして教員の方向目標として捉えられるが、CAN-DO は生徒の能力評価を意図している。また、欧米で捉えられるグローバル化と日本で捉えられるグローバル化にも差異があるように思われる。だからといって、このシステムは日本では受け入れられないと早急に判断するのも、その代替システムがない限り検討はされるべきものである。複数言語主義の観点を考えると、日本の中高生にも、English Native に近づく努力に明け暮れるのではなく、思考力・判断力・表現力を持って対応できることが求めていくべきであろう。すると、こうしたリストは思考力・判断力・表現力を育成する視点やグローバルな視点を培うために扱う教材内容やタスクなどの活動内容などを視野に編成されることになるのではないだろうか。それを基に評価の観点としてのルーブリックを構築することになるのではないか。

あと一つ課題は、授業を基にした評価は学校差があるが、文科省が進める CAN-DO リストは日本人中高生を一つの基準で評価していきたいというねらいがあるようにうかがえる。授業以外の言語活動での評価は統一できるだろうが、各教員の指導に基づく授業の成果としての評価は一律に行うことが可能かどうかは検討する必要がある。

注1)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/attach/1247196.htm

注2)

<http://www.oecd.org/dataoecd/47/61/35070367.pdf>

注3)

小池生夫「CEFR と日本の英語教育の課題」英語展望 2009 年冬号